総合教育センターだより

街路樹

発行　第　７９　号
平成２６年　１月　２４日（金）
いわき市総合教育センター
いわき市平字堂根町１－４
０２４６（２２）３７０５

平成25年度 研究実践発表大会について

今年度のいわき市総合教育センター教育実践研究発表大会では、大会テーマ「 ともに学ぶ ～いわきの未来 子どもたちのために～（二年次）」のもと、午前の部では、調査研究委員会による2年間にわたる調査・研究をまとめた日々の授業や教育活動に係る改善策や提案などの発表を、午後の部では、「学び合う授業づくり・学校づくり」と題しての東京大学大学院教育学研究科教授の秋田喜代美先生による講演会を行います。

調査研究委員会の発表では、7つの研究部会が、実際の授業を記録した動画や豊富な資料をもとに、日々の授業や生徒指導、特別活動などで、効果的な授業の導入のしかたや指導のコツ、すぐに役立つヒント集や資料集、実践例などを紹介します。今回の発表は、来年度はじめに調査研究委員会がまとめた研究物として、市内の小・中学校へ貸し出しを予定している資料の内容をいち早く知るよい機会となるでしょう。

また、午後の講演会では、昨年度からの本大会のテーマでもある、学校や授業における「学び」のあり方について、この分野の研究実践のリーダー的存在である秋田喜代美先生から、直接、学校現場の実践例などをもとにした貴重な話をお聞きすることができる、またとない機会でなることでしょう。

今、学校教育に求められている、子どものかかわり合いや「学び」のある授業とはどのようなものなのか、そして、そうした授業を実践していくためには、学校として、教師として、何が必要で、どのように対応していけばよいのかといった、多くの先生方が悩んでおられる疑問にお応えし得る内容となることが期待されます。さらには、教師にとって、「教える」ということの意味は何なのか、学校の果たすべき役割と責任は何なのかといった根本的な問題についても、考え直すよい機会になるのではないかと思います。

参加される先生方には、この機会に、ぜひとも日頃の授業に対して抱いている悩みについて一緒にお考えいただくとともに、目の前の子どもたちのために、参加者一人一人が、明日からのよりよい授業実践のためのヒントをお持ち帰りいただければと願っています。

○期　日　　平成２６年２月１日（土）

○会　場　　いわき市文化センター　大ホール

○日　程

9:30	10:00	10:30	10:40	12:00	13:00	15:30	15:40
受付	開会式	準備・休憩	調査研究委員会　研究報告 ～日常の教育活動における「知りたい」に応える～ 国語部会、算数・数学部会 社会部会、理科部会、英語部会 生徒指導部会、特別支援教育部会	昼食・休憩	講演		閉会式

特別支援教育から

～叱らずに好奇心を刺激～

小学校に入学後、なかなかひらがなを覚えられなかった。文章は、一字一字拾い読み。何度教えられても、助詞の「は」を「ワ」と読めない。「何で読めないの」と母が叱ると、「わからん」と火がついたように泣いた。

小1の終わり、LDと診断された。また、「視覚認知」に問題があるとの指摘も受けた。両親が最も強く助言されたのは、自己肯定感を傷つけるな、ということだった。「なぜ読めないのか」「読めるはず」、母がさんざん繰り返してきた言葉だった。母は、自分たちがしてきたことを考えると、ぞっとすると振り返る。

小学2年。読み書き困難を減らす方法を見つけようと試行錯誤を始めた。教科書は見やすく拡大コピー。区別できるようにと、担任や母が助詞に〇をつけた。

息子にとって、文章は無意味な記号の羅列に見えるのかもしれない。そう考えた母は、抑揚をつけたりジェスチャーを加えたりしながら、息子と教科書を読んだ。物語の内容をイメージしてほしかった。自分でフレーズを作って覚える方法を提案すると、夢中になった。

「知的好奇心を伸ばすことを大事にしたい」と父。「今もトライ＆エラーの連続です」と母は言う。

朝日新聞（H25.5.25）「読み書き障害のサポート上」より引用

私たち教師も児童生徒に対して、「なぜできないの」「できるはず」と接していることはないでしょうか。本人もその理由が分からず、辛い思いをしている児童生徒がいることを理解し、保護者や関係機関との連携を深めながら、よりよい支援の在り方について模索していくことが必要なのだと改めて感じさせられました。

教育相談係から

～　サインの陰に　～

行動でサインを送り始めた子の保護者と話しを進めるうちに、子を取り巻く家庭環境や生育歴の中に、行動の核となる部分が見え隠れすることがあります。

例えば、学校でのトラブルが起爆剤となり、核の部分が行動となって表出している場合、学校では起爆剤状態への対応と同時に、その核となる個の背景をしっかりと見据えて対処することが大切です。子どもの現象面ばかりにとらわれずに、冷静にその背景を再点検したいものです。